

第 32 回（令和八年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

社会インフラとしての水への認識と、日常の関心・行動に変化

四国を対象とした特別調査から地域特性も明らかに

＝調査期間：2026年6月11日(木)～16日(火)＝

特定非営利活動法人日本水フォーラムでは、今年6月に、東京圏（埼玉・千葉・東京・神奈川）、中京圏（岐阜・愛知・三重）、大阪圏（京都・大阪・兵庫）〈以下、東名阪〉の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、集計結果をまとめました。

本調査は、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査として、ミヅカン水の文化センターが1995年より実施。2025年の同センター活動終了に伴い、今年から当会が継承するものです。

今年は、従来の調査設問を中心に、社会インフラとしての水への認識を探る新たな設問を追加しました。経年比較では、複数の設問で各項目の数値が減少する一方、「特にない」「知っていることはない」などの回答が増加し、水への日常的な関心や行動に変化がうかがえる結果となりました。さらに、都市部と地方の意識を比較するため、四国（徳島・香川・愛媛・高知）を対象に、東名阪調査と同様の内容による特別調査を実施しました。また、東京大学 大学院工学系研究科 沖大幹博士に、今年も調査結果の解説をいただきました。

なお、今年の調査データの詳細は当会HP (<https://www.waterforum.jp/>)、過去（第1回～31回）の情報は、アーカイブとして公開されているミヅカン水の文化センターHP (<https://www.mizu.gr.jp/>) でご覧いただけます。

《調査結果》

【1】水道は生活を支える重要な社会インフラ

- …「安定的な維持が重要だと思うインフラ」では、「水道」が65.2%、「電力」が64.1%と、ともに6割を超えて上位に。
- …「日本で深刻だと認識している水問題」では、水道管の老朽化が40.1%でトップ。値上げを最も受け入れやすいインフラ料金も、「水道料金」が49.3%で1位となった。

【2】水への関心や行動に変化の兆し

- …気候変動を「意識している人」は2011年の65.5%から50.5%へ、「世界で水道水をそのまま飲める国はごくわずか」と知る人も、2018年の67.1%から51.7%へ減少。
- …節水を「意識している人」は昨年の76.4%から70.9%へ、「行っている人」も77.4%から70.4%へ減少。「実践していることはない」は14.0%から20.1%に増加した。

【3】四国調査から見た水への意識の特徴

- …四国の水道水評価は平均7.26点と、東名阪の7.15点を上回った。
一方、「給水制限や断水」への不安は32.5%で、東名阪の27.2%より高い結果に。
- …不安な災害として「水不足(渇水)」をあげた人は27.3%、「将来的な水不足・渇水」への不安も24.9%。水道インフラの今後を「悪くなる」と見る割合も、多くの項目で東名阪を上回った。

◆沖大幹博士による解説 ～Oki's View～

調査結果を、家計支出や観測データ、災害の記憶、地域が抱える課題と照らし合わせながら、水を暮らしの生命線として捉える意識や、安定した維持管理への期待、気候変動・災害への危機意識の変化について、世代や地域の違いも交え、4つのコラムでご考察いただきました。

【この件に関するお問い合わせ先】

特定非営利活動法人 日本水フォーラム（認定NPO法人）

担当：桑原 Email：office-info[at] waterforum.jp（[at]を@に代えて送信してください）

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 社会インフラとしての水／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇日本で深刻な水問題、4割超が水道管老朽化問題を深刻視…トピック【1】
「知っていることはない」が3割超 3ページ
- ◇インフラ料金“妥当だ”と感じている人”が最も多いのは水道料金 3ページ
- ◇インフラ料金値上げを最も許容できるのは「水道料金」…トピック【1】 4ページ
- ◎～Oki's View～① 水は命だと思われているのか？ 4ページ
- ◇安定的な維持が重要だと思うインフラ「水道」「電力」が6割超で双璧をなす…トピック【1】 5ページ
- ◇水道インフラの今後、全項目で「悪くなる」が「良くなる」を上回る
老朽化対策や料金負担は悪化を懸念も、安定供給や安全性には一定の信頼感？ 5ページ
- ◎～Oki's View～② 水道には安定した維持管理を期待 6ページ

■ 水と環境／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇気候変動への危機“意識している人”の割合が15年前から減少…トピック【2】 7ページ
- ◇気候変動の危機項目、より体感しやすいリスクに危機感
各項目の数値は、この15年間で減少傾向 7ページ
- ◎～Oki's View～③ 気候変動への無関心 8ページ
- ◇世界の水問題の認知「水道水をそのまま飲める国はごくわずか」断然トップも数値は減少
「知っていることはない」は増加の一途…トピック【2】 8ページ

■ 水と災害／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇日頃不安や心配に感じていること「特に感じない」がトップに 9ページ
- ◇不安な災害「台風」の数値が激減。「地震」「ゲリラ豪雨」も大きく減少 10ページ
- ◎～Oki's View～④ 安心で幸せな日本の暮らし 10ページ

■ 水道水に関する意識／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇水道水の評価、全体の平均点7.15点
エリア別トップは中京圏の7.28点 11ページ
- ◇水道水への不満“不満がない人”が過半数 11ページ
- ◇水道水の将来への不安、3人に1人以上が「不安なし」も、50代・60代は“不安あり”？ 12ページ

■ 節水の意識と行動／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇節水を意識している人は減少…トピック【2】 13ページ
- ◇節水を行っている人も減少…トピック【2】 13ページ
- ◇日常生活で実践していること「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」が初のトップ陥落
「実践していることはない」が2割超まで増加…トピック【2】 14ページ

■ 水と生活・文化／東京圏・中京圏・大阪圏

- ◇知っている祝日・記念日「水の日」の認知率は横ばい 14ページ

■ 【特別レポート】四国における水にかかわる生活意識

- ◇日本で深刻な水問題、渇水リスクをより深刻視 15ページ
- ◇インフラ料金“高いと感じている人”が東名阪より多い 15ページ
- ◇インフラ料金値上げの許容傾向は東名阪と同様も、数値に若干の差 16ページ
- ◇安定的な維持が重要だと思うインフラ「食料供給」「医療」など上位に独自色も 16ページ
- ◇水道インフラの今後、「悪くなる」の数値の高さは地域が抱える課題への意識も影響？ 17ページ
- ◇約3人に1人が「給水制限や断水」に不安を感じている…トピック【3】 17ページ
- ◇不安な災害、多くの項目で東名阪の数値を上回る
「水不足（渇水）」「津波」など上位に地域特性も…トピック【3】 18ページ
- ◇水道水の評価、四国の平均点は7.26点…トピック【3】 18ページ
- ◇水道水への不満、東名阪と同様「不満なし」多数、不満の傾向は「料金＞味・質」 19ページ
- ◇水道水への不安、4人に1人は「将来的な水不足・渇水」を不安視…トピック【3】 19ページ

■ 調査概要

20ページ

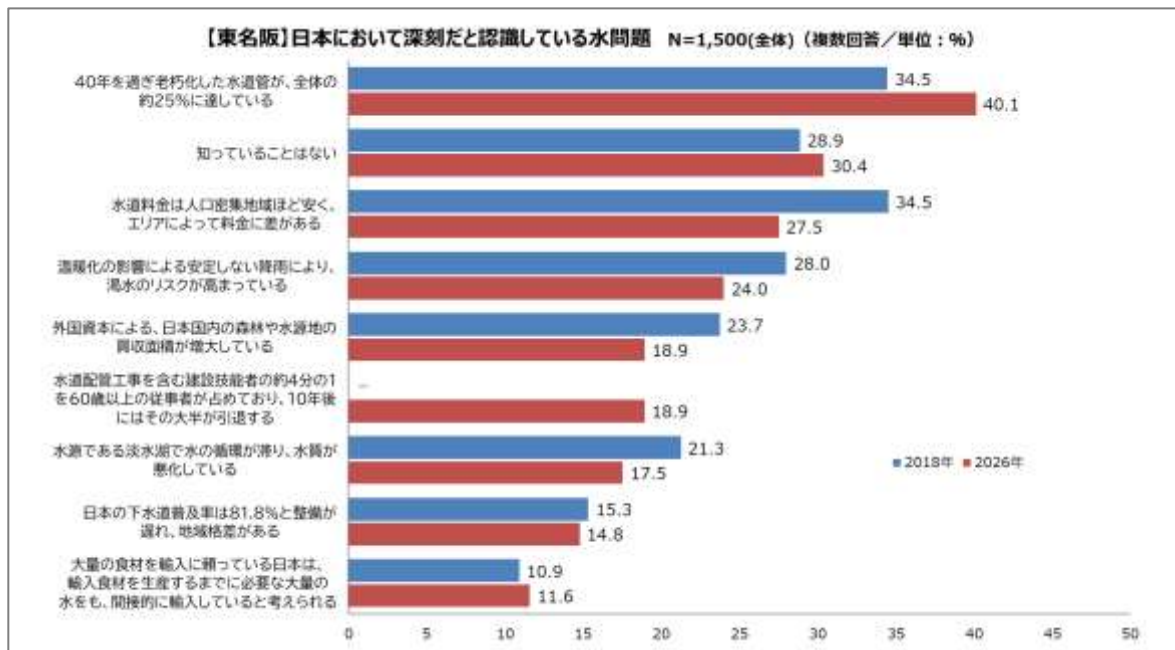
Q.日本において深刻だと認識している水問題は？（8択+知っていることはない）

◇4割超が水道管老朽化問題を深刻視

「知っていることはない」が3割超

日本において深刻な問題だと認識している水問題について、予め項目を提示して聞いたところ、1位「40年を過ぎ老朽化した水道管が、全体の約25%に達している」（40.1%）、2位「知っていることはない」（30.4%）、3位「水道料金は人口密集地域ほど安く、エリアによって料金に差がある」（27.5%）となりました。

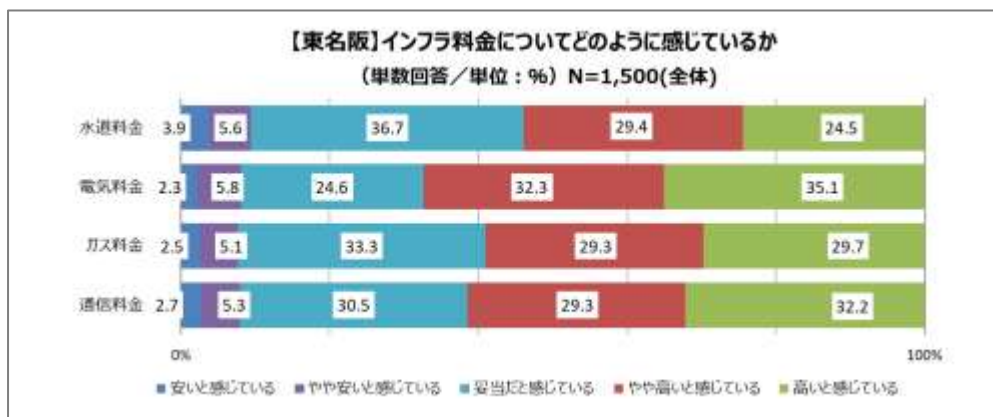
前回調査を行った2018年は、「40年を過ぎ老朽化した水道管が、全体の約25%に達している」と「水道料金は人口密集地域ほど安く、エリアによって料金に差がある」が同率1位（ともに34.5%）でしたが、今回は「40年を過ぎ老朽化した水道管が、全体の約25%に達している」が前回より5.6ポイント増加した一方で、「水道料金は人口密集地域ほど安く、エリアによって料金に差がある」は7.0ポイント減少しました。また、3割超が「知っていることはない」と回答し、前回から順位を上げました。水道管老朽化に関する数値の上昇については、昨年発生した埼玉県八潮市の道路陥没事故を契機に、国や自治体による調査・点検が本格化したことなどにより、事態の深刻さがより広く認知された可能性も考えられます。



Q.インフラ料金についてどのように感じているか？（それぞれ5択）

◇“妥当だと感じている人”が最も多いのは水道料金

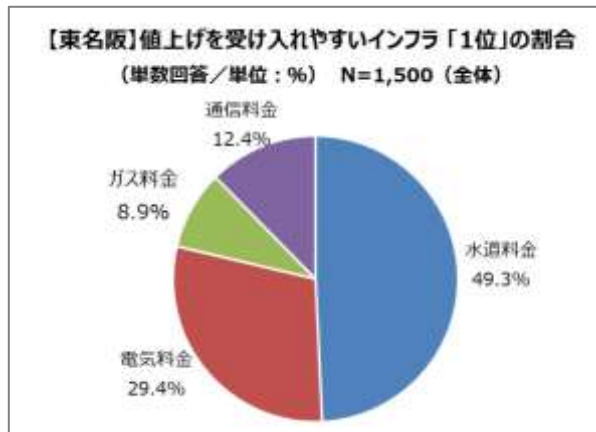
昨今、さまざまなものの値上げが相次ぐ中で、水道、電気、ガス、通信の各料金について、現在どのように感じているかを「安い」「やや安い」「妥当」「やや高い」「高い」の5択でそれぞれ聞いたところ、「妥当だと感じている」の回答率は、水道料金が36.7%と最も高く、次いでガス料金33.3%、以下、通信料金30.5%、電気料金24.6%となりました。ただし、全体的な傾向としては、“高いと感じている人”（「高い」+「やや高い」）の割合（電気料金67.4%、通信料金61.5%、ガス料金59.0%、水道料金53.9%）が、“安いと感じている人”（「安い」+「やや安い」）の割合（水道料金9.5%、電気料金8.1%、通信料金8.0%、ガス料金7.6%）を大きく上回る結果となっています。



Q.料金の値上げを受け入れやすいインフラは？（項目ごとに順位を選択）

◇値上げを最も許容できるのは「水道料金」

インフラ料金の値上げに対する許容度を探るべく、水道、電気、ガス、通信の各料金について、「今後も安定的なサービスによる快適な暮らしを手に入れるために、値上げを受け入れやすいのはどれか」をたずね、それぞれに1位～4位の順位をつけてもらったところ、「1位」の割合が最も多かったのは水道料金（49.3%）で、以下、電気料金（29.4%）、通信料金（12.4%）、ガス料金（8.9%）と続きました。この結果は、前回調査を行った2023年と同様です。水道料金の許容度の高さは、インフラとしての重要性を鑑みたものなのか、それとも相対的な値ごろ感からなのかについては、さらなる実態把握が必要かもしれません。



値上げを許容できるランキング@東名阪

1位	水道料金	49.3%
2位	電気料金	29.4%
3位	通信料金	12.4%
4位	ガス料金	8.9%

※「1位」の回答率順位

～Oki's View～ ①

【水は命だと思われているのか？】

インフラ料金の妥当性(3頁)に対する回答では水道料金が「安い」あるいは「やや安い」と感じている方、妥当だと感じている方が電気料金やガス料金、通信料金に比べて多い。やはり水は暮らしに不可欠で多少の費用を払うのも致し方ない、と多くの方が感じているのか、と思うかもしれない。しかし、政府統計の家計調査(総世帯)の2025年度の統計によると、1世帯あたり1ヶ月の平均的な支出は、下水道料金も含む上下水道料金が3,935円であるのに対し、電気代が10,777円、ガス代が4,082円、通信代が9,702円となっており、「高い」と感じている方の順位は平均支出の順番になっている。毎月どのくらいの公共料金を支払っているのか、自覚のない方も多いかもしれないが、調査結果からは支払額をそれなりに把握しているのではないかと想像される。その割には値上げを許容できるインフラとしてガスを選んだ方がとても少ないのは、なぜだろうか。

また、地域独占である水道や電気、ガスに対して携帯は会社も契約の仕方も選べるのに、値上げを許容できないインフラの1番(66.1%)が通信なのも意味では不思議である。固定電話の保有状況が2024年で55.1%なので、実際にはあまり使わないのにまだ固定電話も残している、といった世帯の意向の反映なのかもしれない。

値上げを許容できないランキング@東名阪

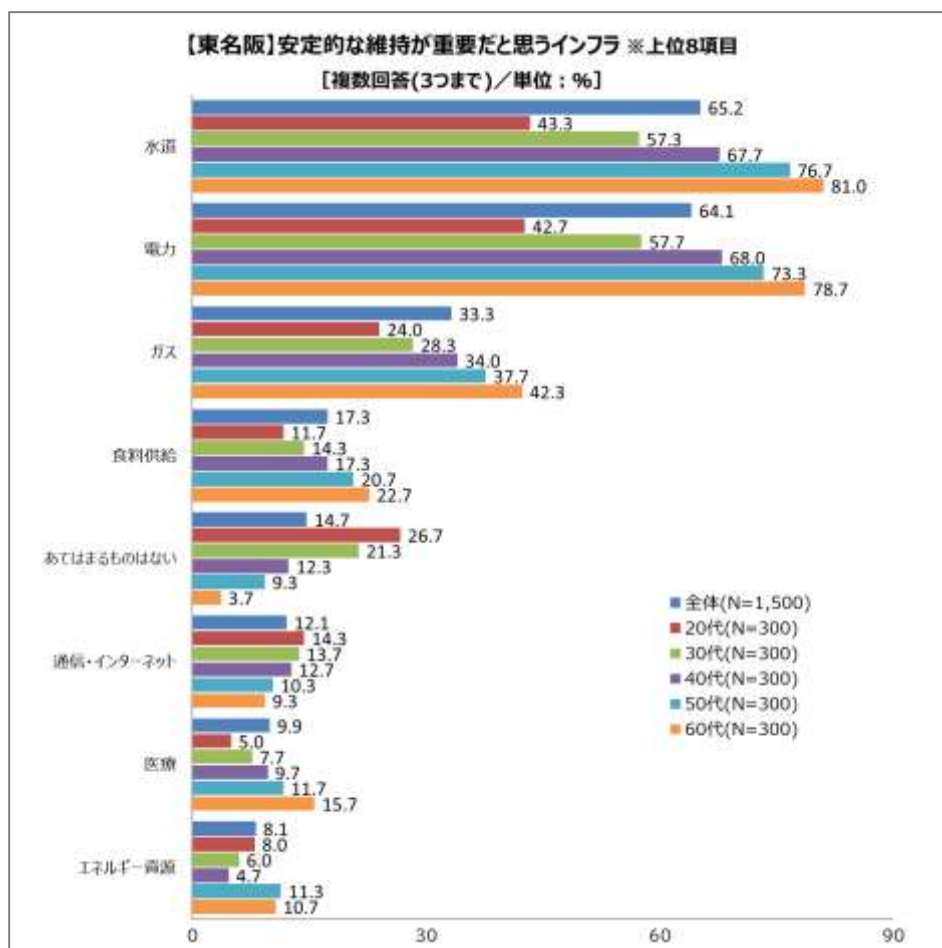
1位	通信料金	66.1%
2位	ガス料金	12.9%
3位	水道料金	11.2%
4位	電気料金	9.8%

※「4位」の回答率順位

Q. 安定的な維持が重要だと思うインフラは？（11択+あてはまるものはない）

◇「水道」と「電力」が6割超で双璧をなす

公共インフラをはじめとしたさまざまなインフラを選択肢にあげ、「今後の社会において、安定的な維持が重要だと思うものは何か」を最大3つまで選んでもらったところ、1位「水道」（65.2%）、2位「電力」（64.1%）がともに6割超で双璧をなし、以下、3位「ガス」（33.3%）、4位「食料供給」（17.3%）、5位「あてはまるものはない」（14.7%）となりました。年代別にみると、「水道」「電力」「ガス」「食料供給」「医療」といった多くの項目において、年代が上がるほど数値が高くなる中、「通信・インターネット」と「あてはまるものはない」については、年代が下がるほど数値が高くなるという逆の傾向がみられました。



Q. 水道インフラは今後どうなると思うか？

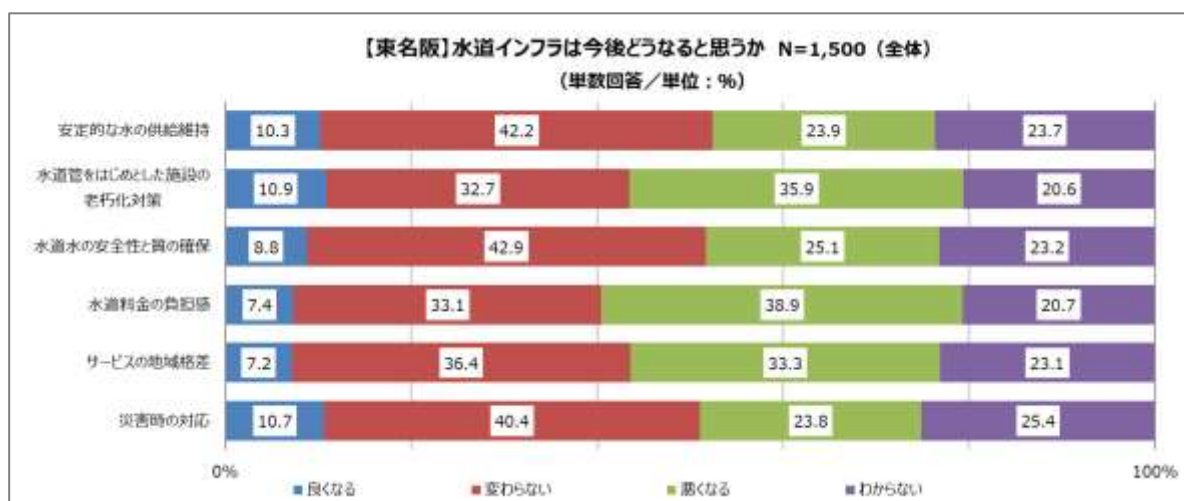
① 安定的な水の供給維持/② 水道管をはじめとした施設の老朽化対策/③ 水道水の安全性と質の確保/
 ④ 水道料金の負担感/⑤ サービスの地域格差/⑥ 災害時の対応（それぞれ4択）

◇全項目で「悪くなる」が「良くなる」を大きく上回る

今後の水道インフラや水環境を考えた時に、① 安定的な水の供給維持、② 水道管をはじめとした施設の老朽化対策、③ 水道水の安全性と質の確保、④ 水道料金の負担感、⑤ サービスの地域格差、⑥ 災害時の対応についてどうなると思うかを、それぞれ4択（良くなる/変わらない/悪くなる/わからない）でたずねたところ、「良くなる」が「悪くなる」を上回った項目は1つもなく、いずれの項目も「悪くなる」の数値が「良くなる」の数値を大きく上回る結果となりました。

◇老朽化対策や料金負担は悪化を懸念も、供給や安全性には一定の信頼感？

項目別にみると、「水道管をはじめとした施設の老朽化対策」「水道料金の負担感」については、「悪くなる」がともに35%超と他の項目に比べ数値が高かったことから、今後の悪化をより懸念していることがうかがえます。一方、「安定的な水の供給維持」「水道水の安全性と質の確保」といった項目は、「変わらない」が42%超と比較的高くなっています。これは、「水道水の10点満点評価」の設問（11頁）において、近年は平均点が7点台と比較的高く推移していることなども踏まえると、現在の水道サービスに対する一定の信頼感を背景に、今後もその状態が維持されとの見方によるものとも考えられます。



～Oki's View～ ②

【水道には安定した維持管理を期待】

日本で深刻だと認識している水問題(3頁)の1位(40.1%)が「老朽化した水道管が全体の約25%に達している」である反映か、安定的な維持が重要だと思うインフラ(5頁)でも水道が1位(65.2%)となっている。電力もほぼ同率(64.1%)で、四国では水道(61.6%)が2位、電力(64.0%)が1位と逆転しているところを見ると、私たちはこの2つをほぼ同じように最も重要な生命線だと捉えているのだろう。四国で水道が少し下がっているのは、いざとなれば井戸水が使える世帯もあるからかもしれない。

注目すべきなのは、20代の回答は水道(43.3%)でも電力(42.7%)でも60代の水道(81.0%)や電力(78.7%)の半分程度であり、安定的な維持への意欲が低い。安定的な維持が重要だと思うインフラの設問では3つまでに選択を絞ったためか、わたしたちの生存に不可欠な食料供給が17.3%と低くなっているが、やはり20代(11.7%)は60代(22.7%)の半分程度である。

若い世代は通信・インターネットを重要視するのではないかと、とも思われるが、結果的には20代で14.3%と、60代の9.3%よりも多いものの、上位に比べると維持の必要性を感じていないようである。これは、自分自身では経験していかなくとも、自然災害や事故などによって水道や電気が停止した様子を見聞してそれらの重要性をそれなりに理解している上の世代と、物心がついて以来インフラ遮断の経験がなく、また、新聞やニュースに接する機会も少なくて広く他地域における他人の経験を共有しにくい若い世代の差なのかもしれない。

四国では医療(16.8%)が通信・インターネット(13.1%)よりも上位でガス(20.3%)に迫る勢いであり、縮小社会における医療サービスの劣化が深刻に捉えられている様子がうかがわれる。また、この設問(安定的な維持が重要だと思うインフラ)の選択肢には「エネルギー資源」も含まれていて、電力やガスという選択肢が別途あるため、実質的にはガソリンや灯油を意味するが、車社会だと想定される四国でも7位までに入らなかったのは、やはり供給が途絶えた経験がないからかもしれない。

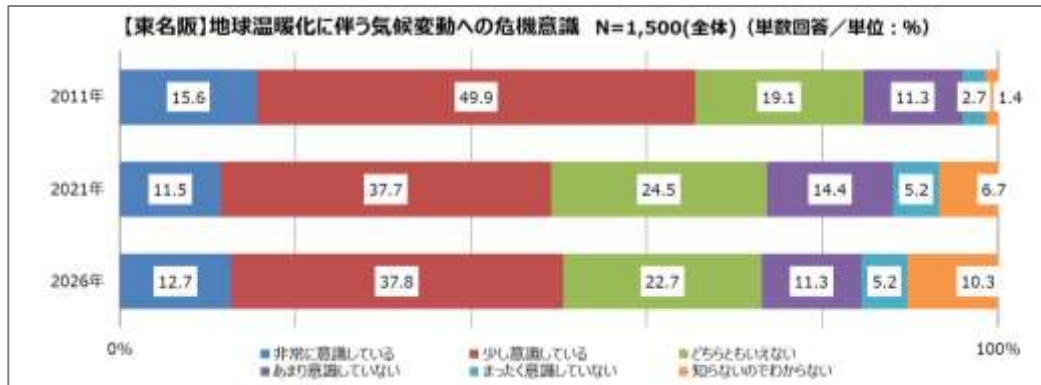
※四国の調査結果については、15頁以降をご参照ください。

Q.地球温暖化に伴う気候変動への危機意識は？（6択）

◇“意識している人”の割合は5年前からほぼ横ばいも、15年前からは減少

地球温暖化に伴う気候変動についての危機意識をどの程度持っているかについてたずねたところ、①「非常に意識している」12.7%、②「少し意識している」37.8%、③「どちらともいえない」22.7%、④「あまり意識していない」11.3%、⑤「まったく意識していない」5.2%、⑥「知らないのわからない」10.3%となりました。“意識している人”（①+②）が過半数の50.5%で多数派を形成する一方、“意識していない人”（④+⑤）も16.5%と一定数存在しています。

5年前の2021年および、15年前の2011年と比較してみると、“意識している人”は2011年65.5%→2021年49.2%と大きく減少、今年は50.5%とほぼ横ばいも、15年間トータルで15ポイント減少しています。また、“意識していない人”は、2011年14.0%→2021年19.6%と増加、今年は16.5%に減少しましたが、ここ15年ではやや増加と、危機意識の低下傾向がみられました。



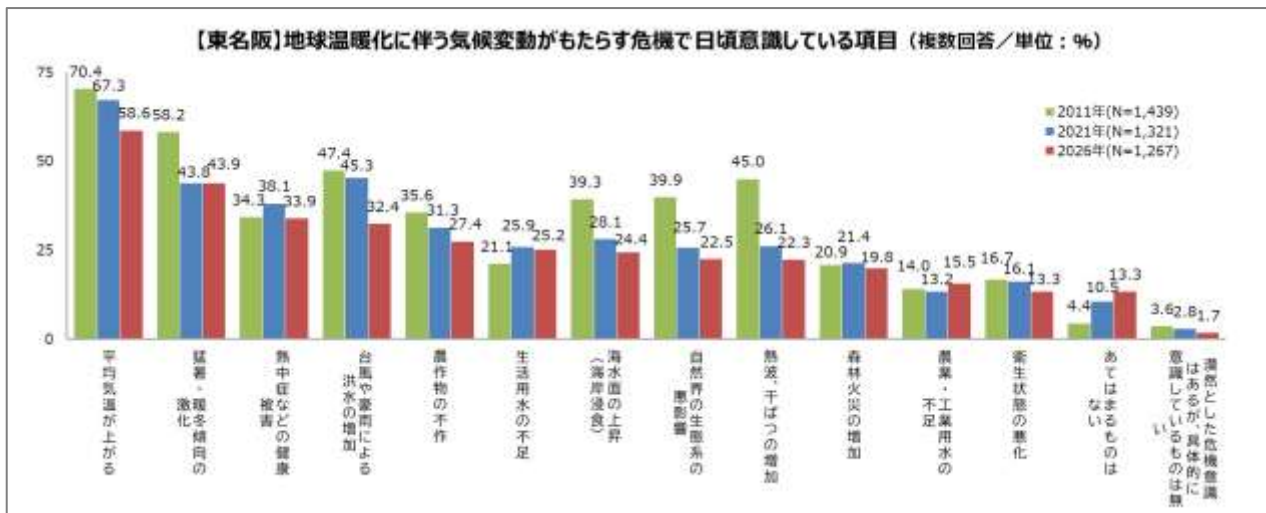
Q.日頃意識している地球温暖化に伴う気候変動の危機項目は？（13択+あてはまるものはない）

◇より体感しやすいリスクに危機感

各項目の数値は、この15年間で減少傾向

日頃意識している地球温暖化に伴う気候変動の危機について、具体的な項目を提示して聞いたところ、1位「平均気温が上がる」（58.6%）、2位「猛暑・暖冬傾向の激化」（43.9%）、3位「熱中症などの健康被害」（33.9%）、4位「台風や豪雨による洪水の増加」（32.4%）、5位「農作物の不作」（27.4%）と、自身の生活に直結する項目への関心の高さをうかがわせるとともに、トップ3の「平均気温が上がる」「猛暑・暖冬傾向の激化」「熱中症などの健康被害」からは、より体感しやすいリスクに危機感を覚える傾向がみられました。

5年前の2021年および、15年前の2011年と比較すると、例えば、「平均気温が上がる」は2011年70.4%→2021年67.3%→今年58.6%と年を追うごとに減少、「猛暑・暖冬傾向の激化」は2011年58.2%→2021年43.8%→43.9%と5年前からは横ばいも、2011年から14.3ポイント減少するなど、この15年間で全体的に数値の減少傾向がみられました。



【気候変動への無関心】

2011年には65.5%だった気候変動を「非常に」あるいは「少し」意識している割合(7頁)が今回は50.5%と大きく減少している。気候変動への危機項目(7頁)でも、「平均気温が上がる」は2011年の70.4%から58.6%に、「洪水の増加」は47.4%から32.4%に、「海水面の上昇」は39.3%から24.4%に下がっている。観測データでは気温上昇は明瞭であり、洪水をもたらす豪雨の頻度は増大し、海水面は上昇している。猛暑日や熱帯夜日数の増加として実感している方が多くても不思議ではないのに危機だとは意識していないのは、暑くても冷房があれば大丈夫だし、豪雨による洪水は自分には影響が及ばないと認識しているからだろうか。一方で、降水日数が長期的に減少し、渇水傾向が懸念されるものの、人口減により生活用水も農業用水も需要減が見込まれるため水需給の逼迫は必ずしも必須ではないにもかかわらず、生活用水の不足や農業・工業用水の不足についてはむしろ2011年よりも増えている点が興味深い。

Q.世界の水問題で知っていることは？（10択+知っていることはない）

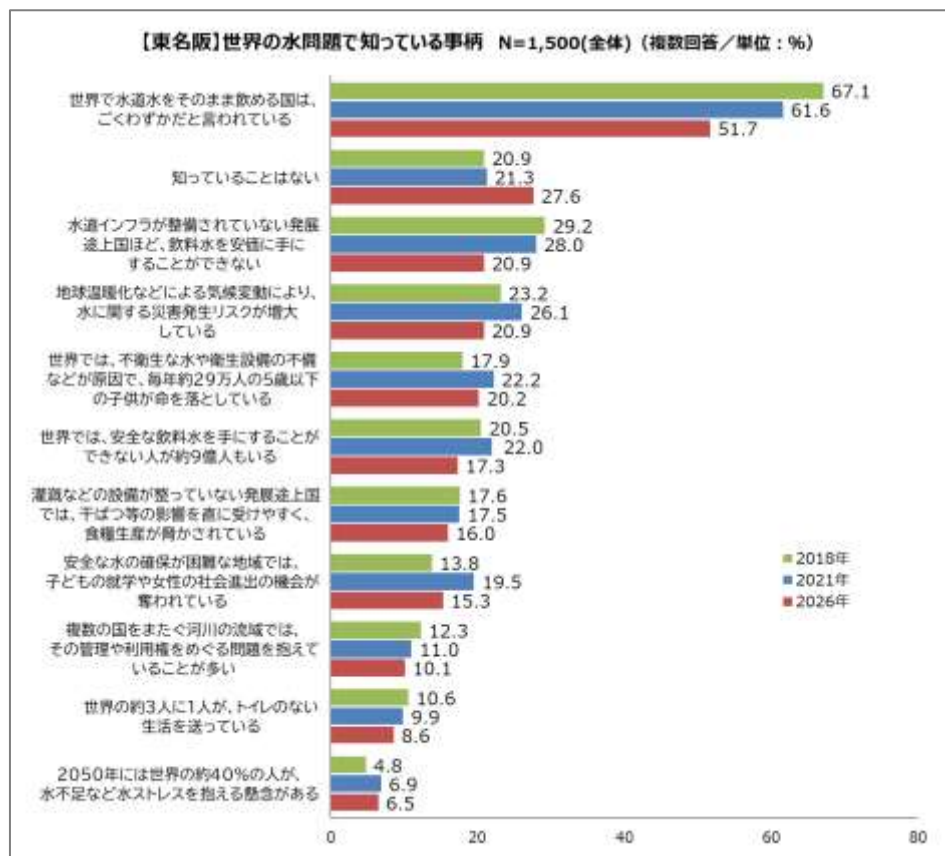
◇「水道水をそのまま飲める国はごくわずか」が断然トップも数値は減少

「知っていることはない」は増加の一途

持続可能な開発目標（SDGs）の各開発目標にもつながるとされる世界の水問題について、予め項目を提示した上で知っている事柄を選んでもらったところ、「世界で水道水をそのまま飲める国は、ごくわずかだと言われている」（51.7%）が5割超で1位、「知っていることはない」（27.6%）が2位、「水道インフラが整備されていない発展途上国ほど、飲料水を安価に手にすることができない」と「地球温暖化などによる気候変動により、水に関する災害発生リスクが増大している」（ともに20.9%）が同率で3位という結果でした。

「世界で水道水をそのまま飲める国は、ごくわずかだと言われている」は、2位以下を大きく引き離す断然トップではありますが、2018年67.1%→2021年61.6%→今年51.7%と数値自体は減少を続けており、他の項目についても概ね同様の傾向がみられます。その一方で、「知っていることはない」は、2018年20.9%→2021年21.3%→今年27.6%と増加の一途を辿っています。

持続可能な開発ソリューション・ネットワーク（SDSN）のSDGs達成度ランキングでは、日本の順位が近年低下しています。本調査結果との直接的な関連性は明らかではないものの、生活者における世界の水問題への意識の動向については、今後も注目する必要があるようです。

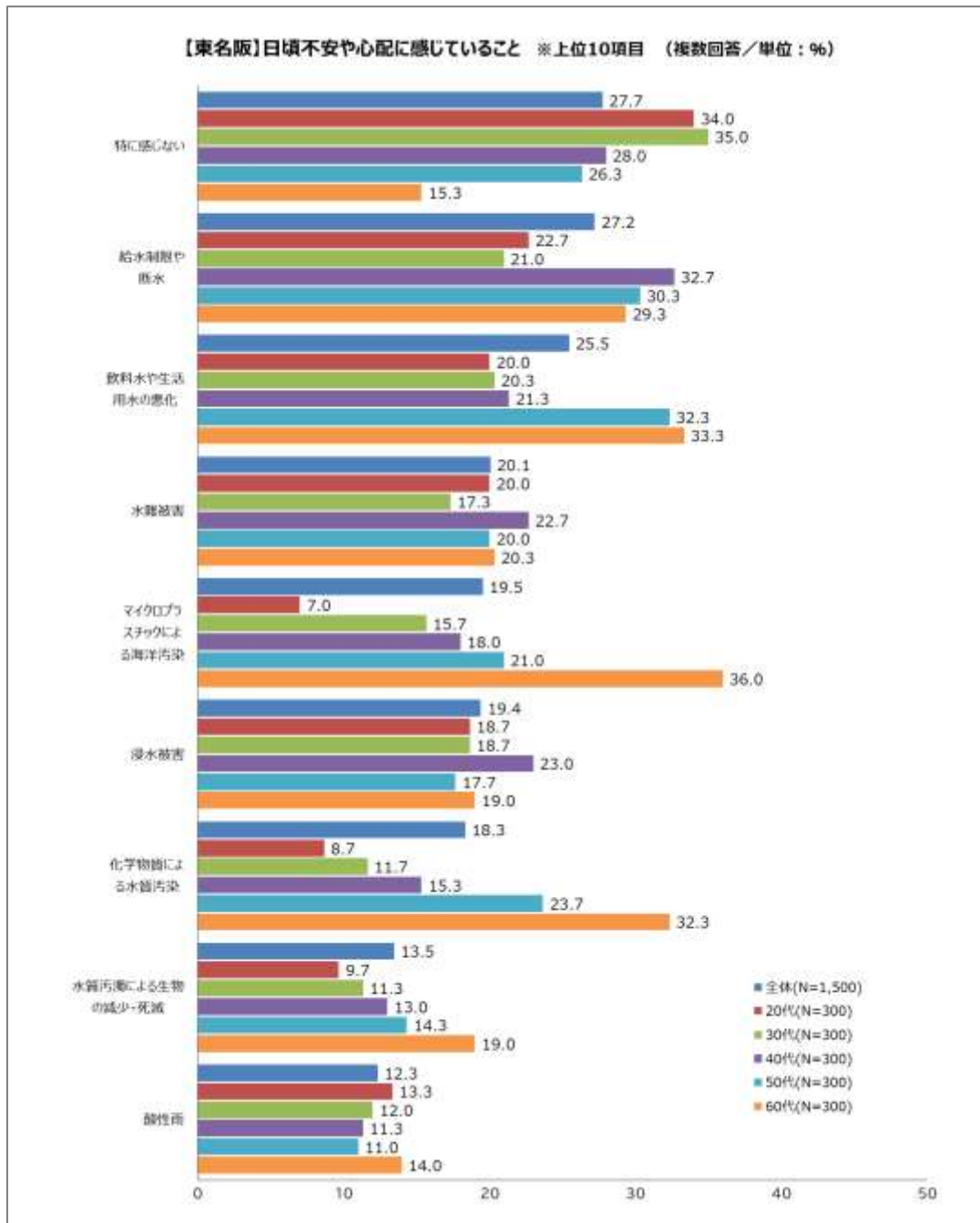


Q.日頃不安や心配に感じていることは？（13択＋特に感じない）

◇「特に感じない」がトップに

各項目で年代による差異あり

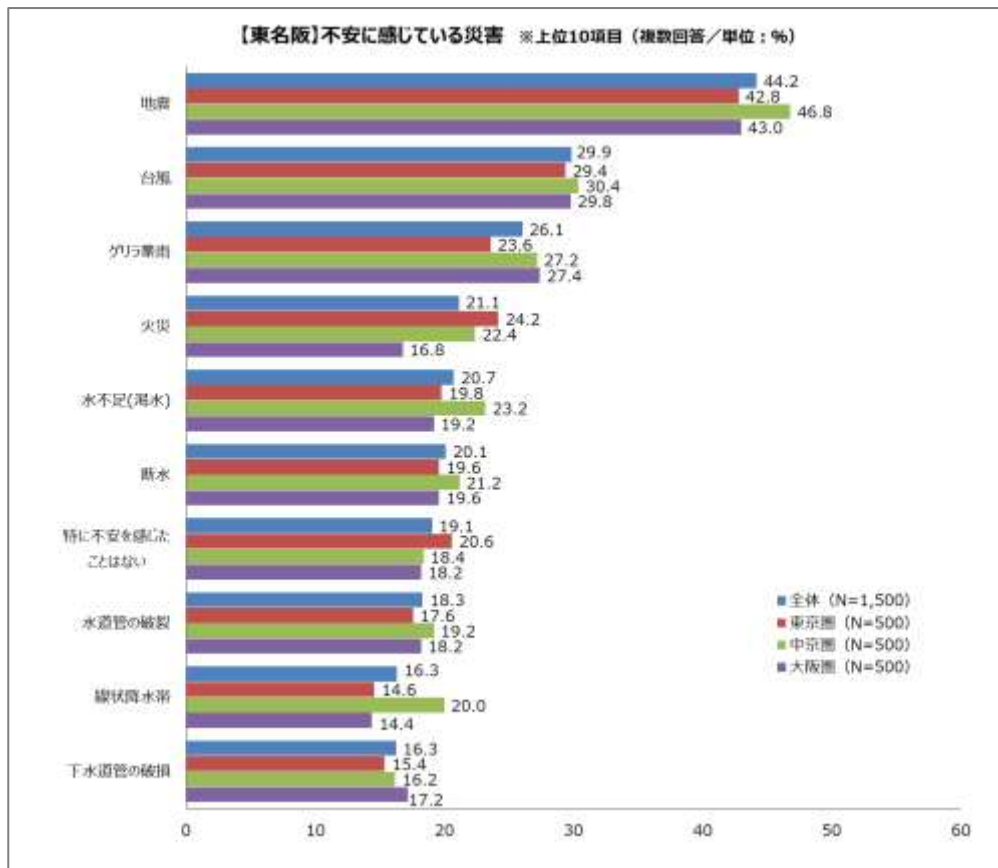
日頃不安や心配に感じている事柄について聞いたところ、「特に感じない」（27.7%）が前回調査を行った2022年の7位から6つ順位を上げ1位となり、2位「給水制限や断水」（27.2%）、3位「飲料水や生活用水の悪化」（25.5%）、4位「水難被害」（20.1%）、5位「マイクロプラスチックによる海洋汚染」（19.5%）と続きました。年代別にみると、「特に感じない」の回答者は20代と30代に多く、これが全体の数値を押し上げています。また、「給水制限や断水」「水難被害」の回答者は40代が最も多く、それ以外の項目では60代が最も多い結果となりました。なお、「マイクロプラスチックによる海洋汚染」「化学物質による水質汚染」といった環境汚染に関する項目では、20代と60代に20ポイント以上の大きな開きがありました。



Q.不安に感じている災害は？（24択＋その他＋特に不安を感じたことはない）

◇「台風」の数値が激減。「地震」「ゲリラ豪雨」も大きく減少

不安に感じている災害は、前回調査を行った2023年に2位だった「地震」が1位、前回1位だった「台風」が「地震」と入れ替わって2位、「ゲリラ豪雨」が3位と、順位に違いはあったものの、トップ3の顔ぶれに変わりはありませんでした。ただし、各項目の数値に目を向けると、「地震」は2023年54.3%→今年44.2%、「台風」は2023年56.9%→今年29.9%、「ゲリラ豪雨」は2023年41.3%→26.1%と、いずれも10ポイント以上の減少。中でも「台風」は27.0ポイントと激減しました。この傾向は、居住地別にみても同様で、「台風」を例にあげると、東京圏55.2%→29.4%、中京圏61.0%→30.4%、大阪圏54.6%→29.8%と、各エリアで大幅な減少がみられました。



～Oki's View～ ④

【安心で幸せな日本の暮らし】

危機意識が減少しているのは気候変動だけではない。不安な災害(10頁)では台風は2023年の56.9%から29.9%に、ゲリラ豪雨は41.3%から26.1%にと大きく減少している。これは、2019年の東日本台風を始めとする大水害の記憶が風化したせいかもしれないが、2024年に能登地震があったにもかかわらず地震を不安な災害だと答えた方は54.3%から44.2%に減少している。他地域の災害は他人事だと受け流す方々が多いのかもしれない。ここでも水不足(渇水)が増えているが、これは、豊川流域で昨年暮れからこの春まで深刻な事態に陥った記憶から中京圏で18.8%から23.2%に増えたためであろう。

一方、四国では自然災害に対する不安が東名阪に比べると高い。地震48.2%に加えて東名阪では上位にあがらなかった津波が22.7%なのは南海トラフ地震への危機感からであろうし、台風37.6%、やはり東名阪ではランクインしなかった線状降水帯21.8%は四国が台風の常襲地域であるのに加えて、隣の九州で線状降水帯が頻繁に発生し四国も脅かされているからであろう。水不足(渇水)が27.3%と高いのも、いまだに十分な水資源確保に苦しんでいる四国ならではの、である。

今後、こうした都市圏と四国の格差が解消されるのか広がるのか、モニタリングを継続して注視する必要があるだろう。

※四国の調査結果については、15頁以降をご参照ください。

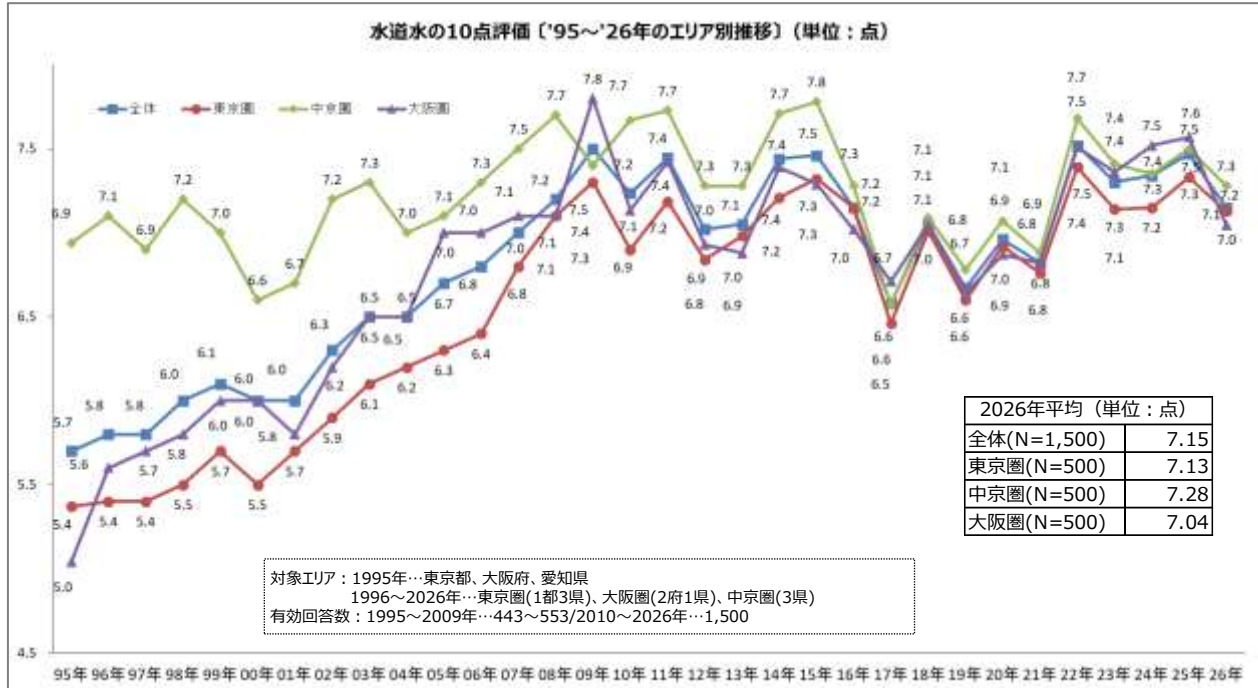
水道水に関する意識／東京圏・中京圏・大阪圏

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均点は7.15点

エリア別トップは中京圏の7.28点

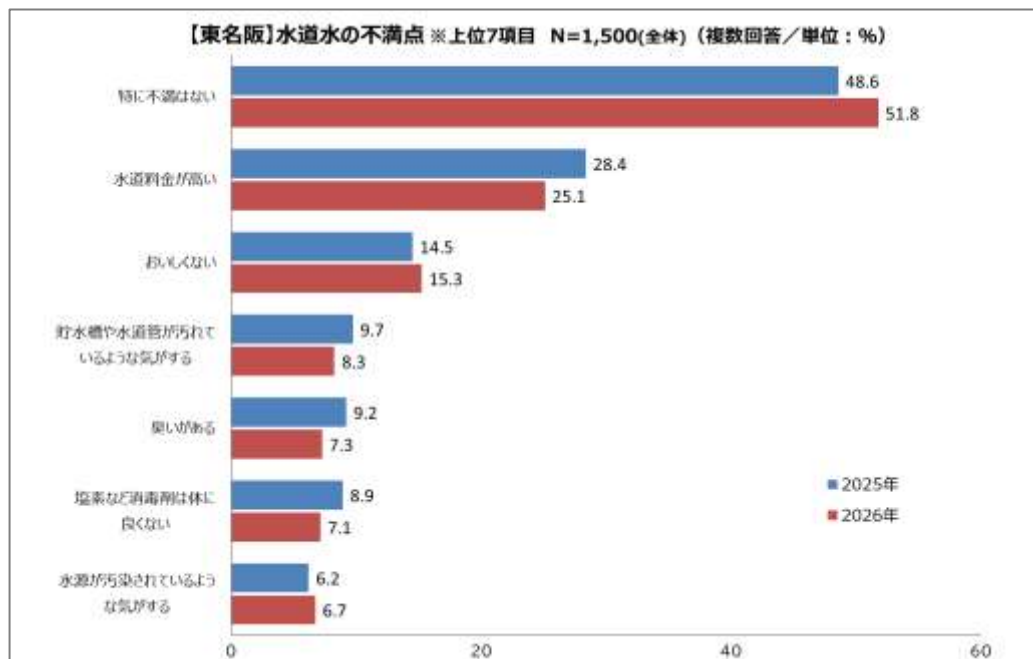
水道水の10点満点評価は、全体の平均が7.15点となり、昨年の7.47点から0.32ポイント減少しました。居住地別では、中京圏が7.28点でトップになったものの昨年から0.22ポイント減少、東京圏は昨年比0.20ポイント減の7.13点、昨年トップだった大阪圏は昨年比0.53ポイント減の7.04点で3エリア中最下位でした。



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇不満がない人が過半数

現在の水道水について不満を感じていることを聞いたところ、「特に不満はない」が過半数を超える回答を得てトップとなりました。「特に不満はない」は、近年は常にトップとして高い数値で推移し、昨年も48.6%と半数近くの方が回答しましたが、今年は5割を超える結果となりました。2位（不満のトップ）の「水道料金が高い」は昨年28.4%→今年25.1%とやや減少。以下、3位「おいしくない」（15.3%）、4位「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」（8.3%）、5位「臭いがある」（7.3%）と、不満の内容は例年と同様でした。

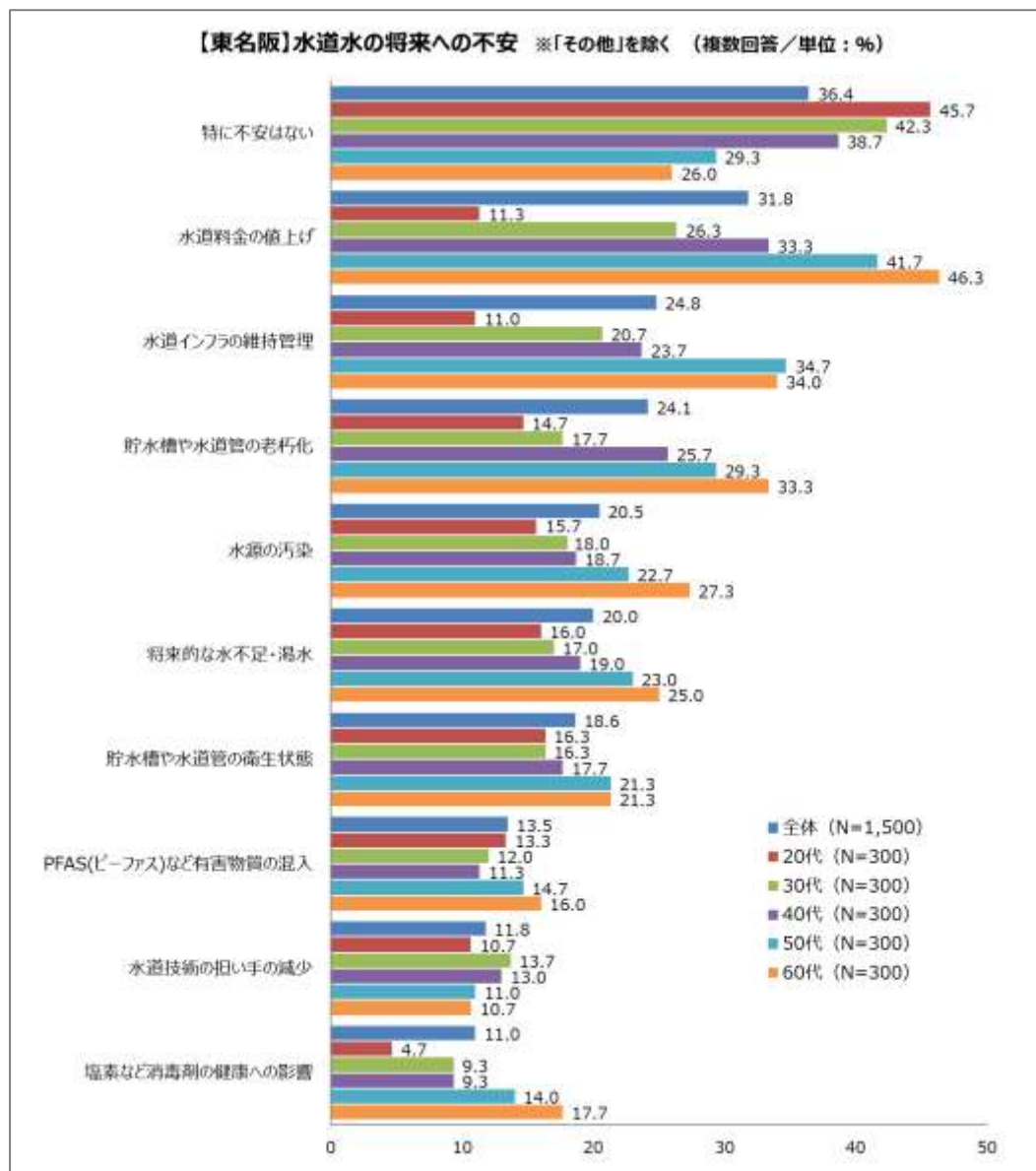


Q.水道水について将来不安に感じていることは？（9択＋その他＋特に不安はない）

◇3人に1人以上が「不安なし」も、50代・60代は“不安あり”？

今回新たに、「水道水について、現在または将来に向けて不安に感じていること」を調査。水質、料金、インフラなど、水道水に関するさまざまな項目を選択肢にあげたところ、1位「特に不安はない」（36.4％）、2位「水道料金の値上げ」（31.8％）、3位「水道インフラの維持管理」（24.8％）、4位「貯水槽や水道管の老朽化」（24.1％）、5位「水源の汚染」（20.5％）となりました。「特に不安はない」は、前述《水道水への不満》の「特に不満はない」ほど高い数値ではないものの、3人に1人以上が回答しています。また、上位5項目のうち、「水道インフラの維持管理」「貯水槽や水道管の老朽化」と2項目がインフラに関する不安でした。

年代別にみると、全体1位の「特に不安はない」については、トップだった年代は20代、30代、40代のみとなっており、50代と60代はそれぞれ3位と5位で、いずれも全体の数値を下回っています。また、全体2位の「水道料金の値上げ」については、50代（41.7％）、60代（46.3％）がともに1位、30代（26.3％）と40代（33.3％）がともに2位だった一方で、20代は11.3％で7位となるなど、年代による違いがみられました。

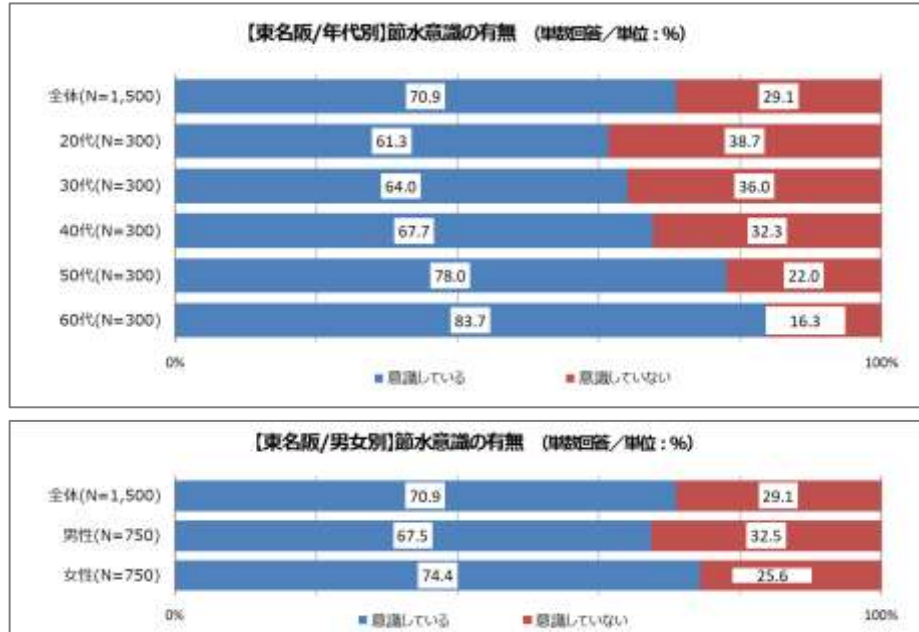


節水の意識と行動／東京圏・中京圏・大阪圏

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）

◇意識している人は減少

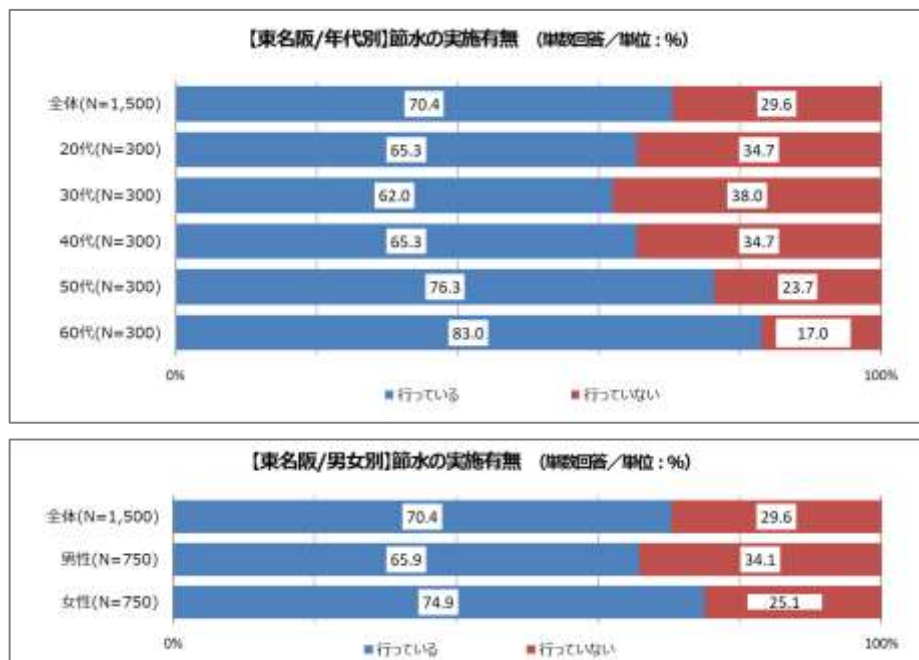
節水への意識は、節水を「意識している」が昨年76.4%→今年70.9%と減少。性別および年代別でも、「意識している」はすべての属性において減少がみられました。女性や高年代層の数値が高い傾向は例年同様となっており、今年は男・女の差が昨年8.0%→6.9%、20代・60代の差が26.0%→22.4%と若干縮小したものの、依然として開きがあります。



Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

◇行動している人も減少

節水の行動については、節水を「行っている」が昨年77.4%→今年70.4%とこちらも減少。性別および年代別でも、前述《節水への意識》と同様、すべての属性で減少しました。また、男・女の数値差は昨年6.6ポイント→今年9.0ポイントと拡大し、20代・60代の差は昨年23.6ポイント→今年17.7ポイントと縮小しました。



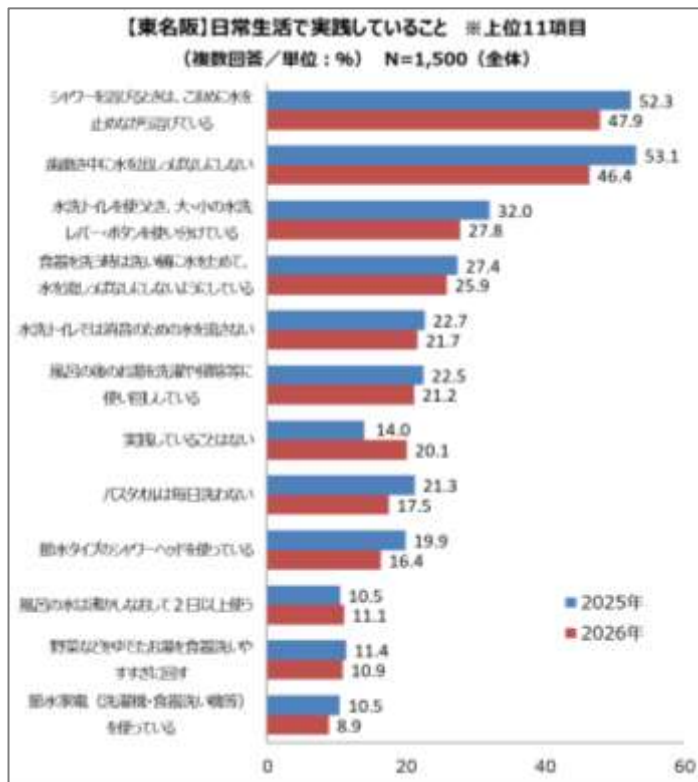
Q.日常生活で実践していることは？（14択＋その他＋実践していることはない）

◇「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」が初のトップ陥落

「実践していることはない」が2割超まで増加

節水や水の再利用の取り組み方を調査する本設問では、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」を選択肢として追加した2001年以降、同項目が昨年まで25年にわたってトップに君臨し続けていますが、今年はどうなったのでしょうか。

結果は、「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びている」が1位となり、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」が初のトップ陥落で2位となりました。ただし、「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びている」は、順位がアップしたものの、数値は昨年52.3%→今年47.9%と減少しており、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（昨年53.1%→今年46.4%）との減少幅の差でトップに躍り出た格好です。この他、3位「水洗トイレを使うとき、大・小の水洗レバー・ボタンを使い分けている」、4位「食器を洗う時は洗い桶に水をためて、水を流しっぱなしにしないようにしている」、5位「水洗トイレでは消音のための水を流さない」といった上位項目の数値はいずれも減少したのに対し、「実践していることはない」は昨年14.0%→今年20.1%と2割を超えました。



水と生活・文化／東京圏・中京圏・大阪圏

Q.知っている祝日・記念日は？（9択＋知っているものはない）

◇「水の日」の認知率は横ばい

水や自然にかかわる祝日・記念日の認知については、水に関する記念日では「世界水の日（3月22日）」（4.9%）、「川の日（7月7日）」（8.4%）が昨年から微増、「水の日（8月1日）」（6.3%）、「下水道の日（9月10日）」（2.7%）は横ばいでした。また、祝日である「海の日（7月第3月曜日）」（60.3%）、「みどりの日（5月4日）」（60.1%）、「山の日（8月11日）」（49.7%）は、いずれも昨年から数値が減少しました。

なお、今年は「水の日」が、1977年の閣議了解により政府が定めてから50年の節目を迎えます。当会としては、本調査における現在の認知状況も踏まえつつ、水の大切さと健全な水循環の重要性について考えるとともに、新たな価値を生み出す取り組みの推進に引き続き貢献してまいります。



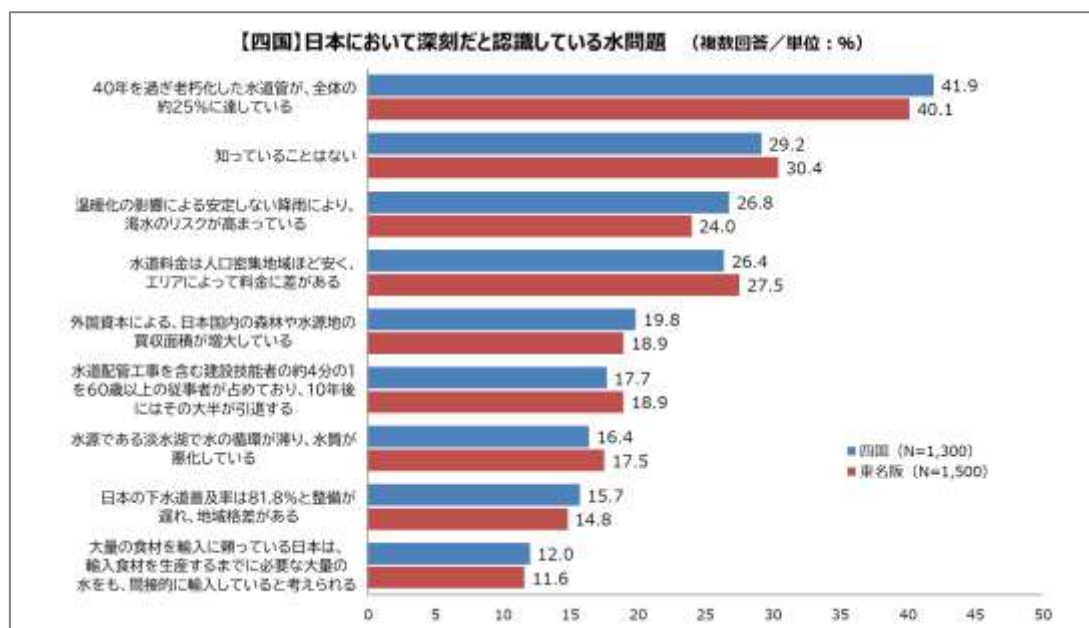
【特別レポート】四国における水にかかわる生活意識

今回、都市部と地方を比較する趣旨で、四国の居住者を対象とした特別調査を、東名阪調査と同様の内容で実施。インフラや災害、水道水に関する設問を中心に、東名阪との比較を行うとともに、四国の水意識を通して地方が示唆するものを探りました。

Q.日本において深刻だと認識している水問題は？（8択+知っていることはない）

◇「渇水リスクをより深刻視

四国のトップ3は、1位「40年を過ぎ老朽化した水道管が、全体の約25%に達している」（41.9%）、2位「知っていることはない」（29.2%）、3位「温暖化の影響による安定しない降雨により、渇水のリスクが高まっている」（26.8%）となりました。トップ2は東京圏・中京圏・大阪圏（以下、東名阪）と同様ですが、3位に「温暖化の影響による安定しない降雨により、渇水のリスクが高まっている」が入っているのが特徴的で、順位・数値ともに、東名阪の結果（4位・24.0%）を上回りました。これは、渇水を多く経験している香川をはじめとした四国エリア特有の傾向と言えるかもしれません。

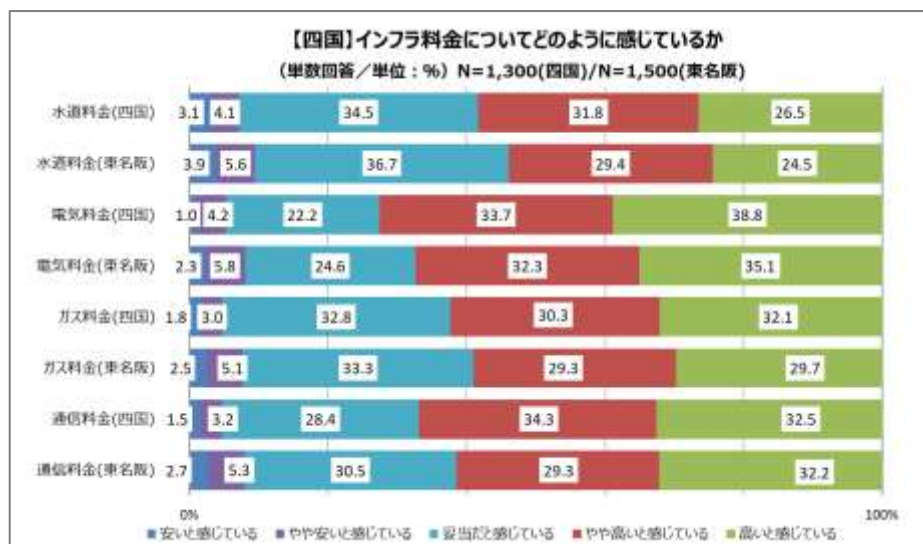


Q.インフラ料金についてどのように感じているか？（それぞれ5択）

◇“高いと感じている人”が東名阪より多い

全体的な傾向として、“高いと感じている人”（「高い」+「やや高い」）の割合（電気料金72.5%、通信料金66.8%、ガス料金62.4%、水道料金58.3%）が、“安いと感じている人”（「安い」+「やや安い」）の割合（水道料金7.2%、電気料金5.2%、ガス料金4.8%、通信料金4.7%）を大きく上回っている点は東名阪と同様も、四国では、その差がより顕著にみられました。

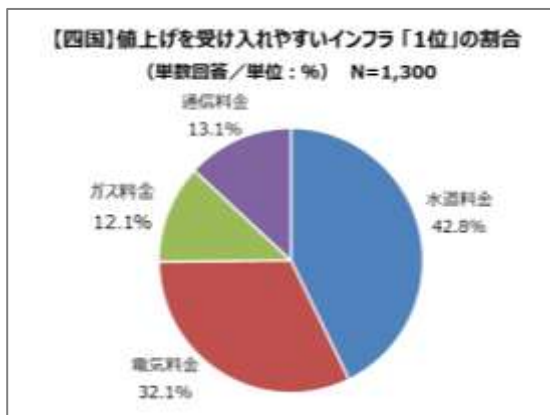
「妥当だと感じている」の回答率は、高い順に水道料金34.5%→ガス料金32.8%→通信料金28.4%→電気料金22.2%となっており、それぞれの数値は東名阪より若干低いものの、傾向に変わりはありませんでした。



Q.料金の値上げを受け入れやすいインフラは？（項目ごとに順位を選択）

◇値上げの許容傾向は東名阪と同様も、数値に若干の差

四国における「1位」回答率の割合は、高い順に水道料金42.8%→電気料金32.1%→通信料金13.1%→ガス料金12.1%となり、東名阪と同様の順位でしたが、東名阪より水道料金の数値が低く、電気料金、通信料金、ガス料金の数値がそれぞれ若干高いといった違いがみられました。



値上げを許容できるランキング@四国

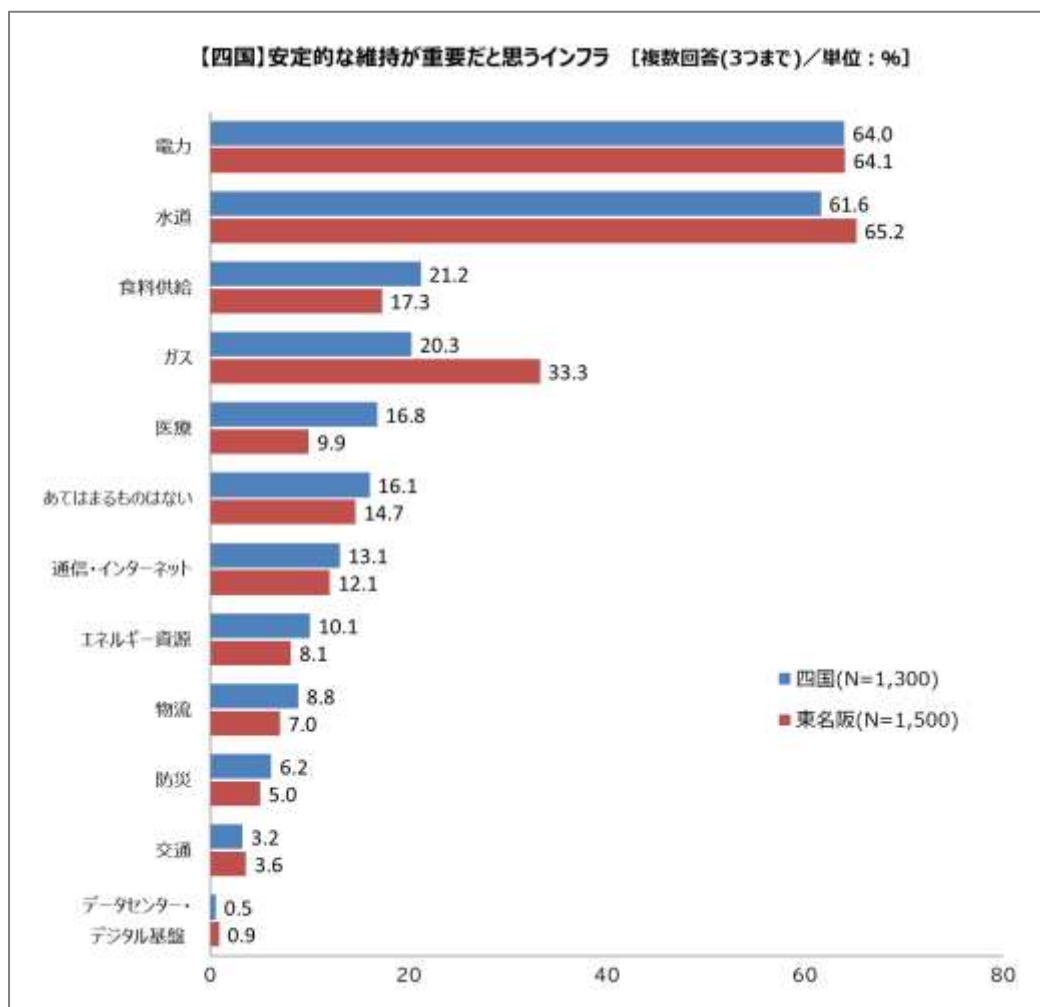
1位	水道料金	42.8%
2位	電気料金	32.1%
3位	通信料金	13.1%
4位	ガス料金	12.1%

※「1位」の回答率順位

Q.安定的な維持が重要だと思うインフラは？（11択+あてはまるものはない）

◇「食料供給」「医療」など上位に独自色も

四国では、1位「電力」（64.0%）、2位「水道」（61.6%）で、東名阪の順位とは異なるものの、「水道」「電力」の数値が6割超と突出して高い点は共通しています。一方、東名阪では4位だった「食料供給」が3位（21.2%）、同じく7位だった「医療」が5位（16.8%）に入るなど独自色もみられました。「医療」については、東名阪との差が比較的大きく、地方医療の維持に対する危機感などが結果に表れた可能性も考えられます。

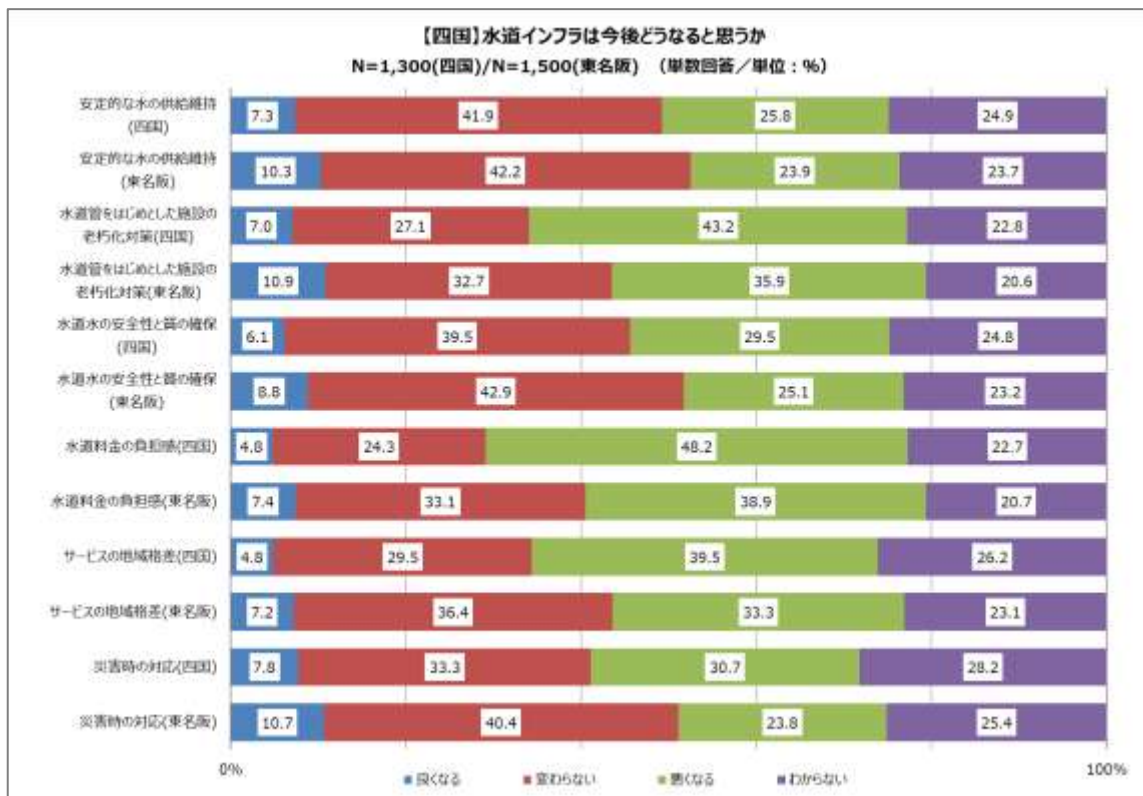


Q.水道インフラは今後どうなると思うか？

①安定的な水の供給維持/②水道管をはじめとした施設の老朽化対策/③水道水の安全性と質の確保/
④水道料金の負担感/⑤サービスの地域格差/⑥災害時の対応（それぞれ4択）

◇「悪くなる」の数値の高さは地域が抱える課題への意識も影響？

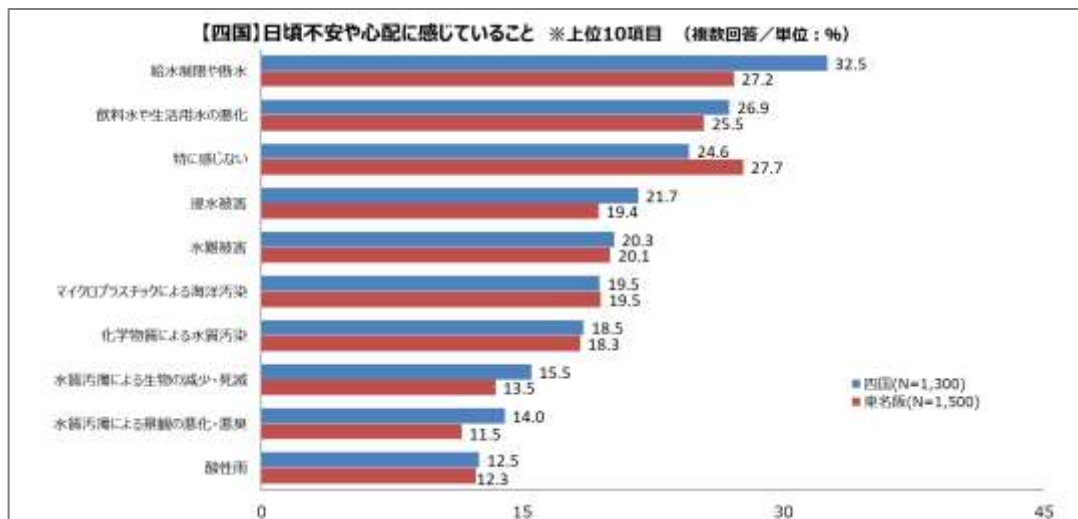
四国では、いずれの項目も「悪くなる」の数値が「良くなる」の数値を大きく上回るという東名阪と同様の傾向を示しながらも、東名阪より「悪くなる」の数値が総じて高いことが違いとしてあげられます。中でも、「水道管をはじめとした施設の老朽化対策」は7.3ポイント差、「水道料金の負担感」は9.3ポイント差、「サービスの地域格差」は6.2ポイント差、「災害時の対応」は6.9ポイント差と、両者に大きな開きがみられました。この結果の背景には、インフラ整備や人口減少、過疎化など、地域が抱える課題への意識が影響している可能性も考えられます。ただし、これが東名阪と四国のみならず、都市部と地方全体に共通する傾向かどうかについては、さらなる検証が必要と言えます。



Q.日頃不安や心配に感じていることは？（13択＋特に感じない）

◇約3人に1人が「給水制限や断水」に不安を感じている

四国のトップは「給水制限や断水」（32.5%）で、2位「飲料水や生活用水の悪化」（26.9%）、3位「特に感じない」（24.6%）、4位「浸水被害」（21.7%）、5位「水難被害」（20.3%）と続きました。1位の「給水制限や断水」には、約3人に1人が回答し、東名阪の数値を5ポイント以上上回るなど、多くの人が水不足や渇水を、日常のリスクとして捉えていることがうかがえる結果となりました。

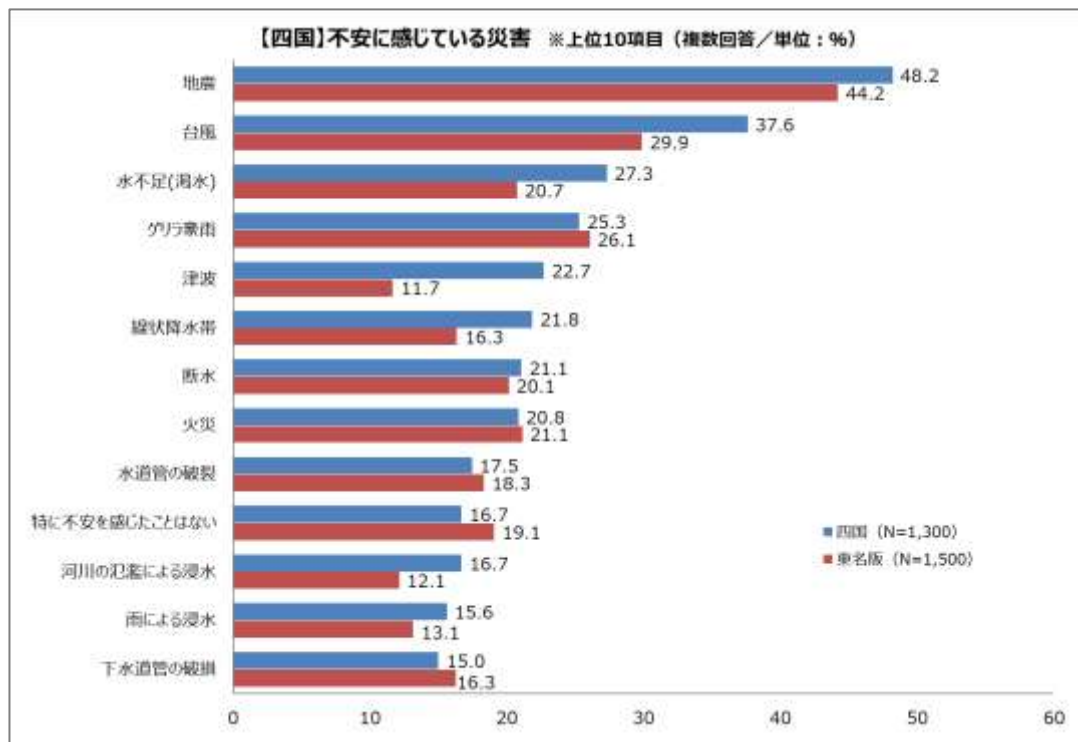


Q.不安に感じている災害は？（24択＋その他＋特に不安を感じたことはない）

◇多くの項目で東名阪の数値を上回る

「水不足（渇水）」「津波」など上位に地域特性も

四国の不安に感じている災害は、1位「地震」（48.2%）、2位「台風」（37.6%）、3位「水不足（渇水）」（27.3%）、4位「ゲリラ豪雨」（25.3%）、5位「津波」（22.7%）となりました。トップ3の一角に「水不足（渇水）」が入り、前述「日頃不安や心配に感じていること」と同様、水がなくなることにより不安を感じていることがうかがわれた他、南海トラフ地震への警戒から「津波」が上位（東名阪では15位）に入るなどの地域特性もみられました。また、「津波」11.0ポイント差、「台風」7.7ポイント差、「水不足（渇水）」16.6ポイント差など、多くの項目で東名阪の数値を上回りました。



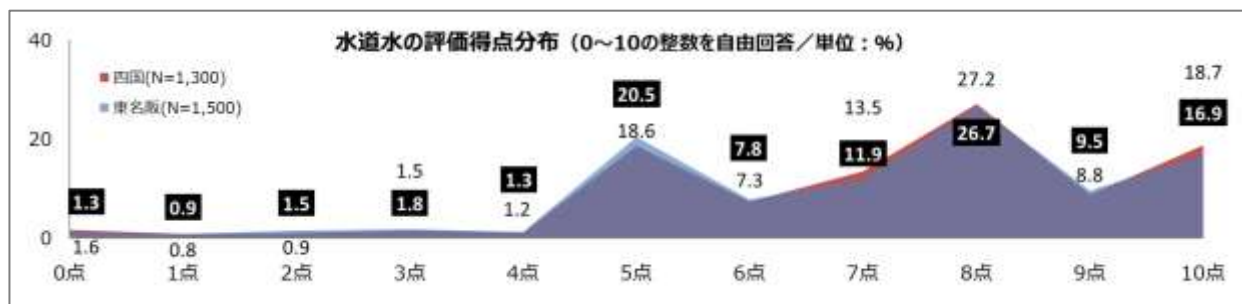
Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇四国の平均点は7.26点

四国の水道水10点満点評価は、平均が7.26点で、東名阪の7.15点を上回り、中京圏の7.28点に次いで高い得点となりました。また、10点満点の回答率は18.7%と、東京圏の18.8%に次いで高い数値でした。

水道水の評価得点（0～10の整数を自由回答／単位：％）

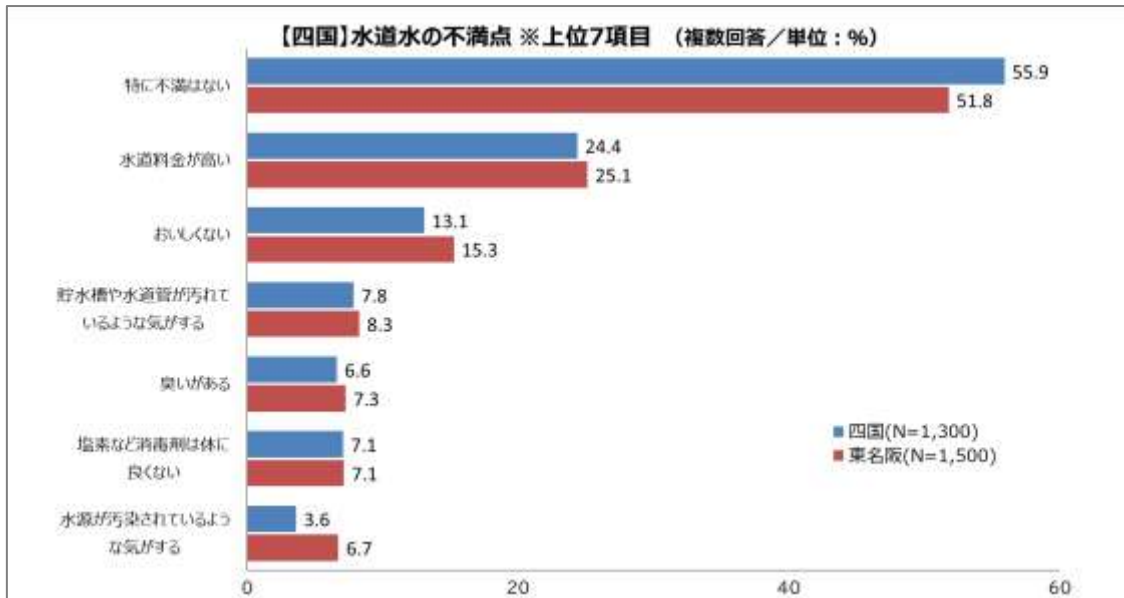
	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	平均点
四国 (N=1,300)	1.6	0.8	0.9	1.5	1.2	18.6	7.3	13.5	27.2	8.8	18.7	7.26
東名阪 (N=1,500)	1.3	0.9	1.5	1.8	1.3	20.5	7.8	11.9	26.7	9.5	16.9	7.15



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇東名阪と同様「不満なし」多数、不満の傾向は「料金＞味・質」

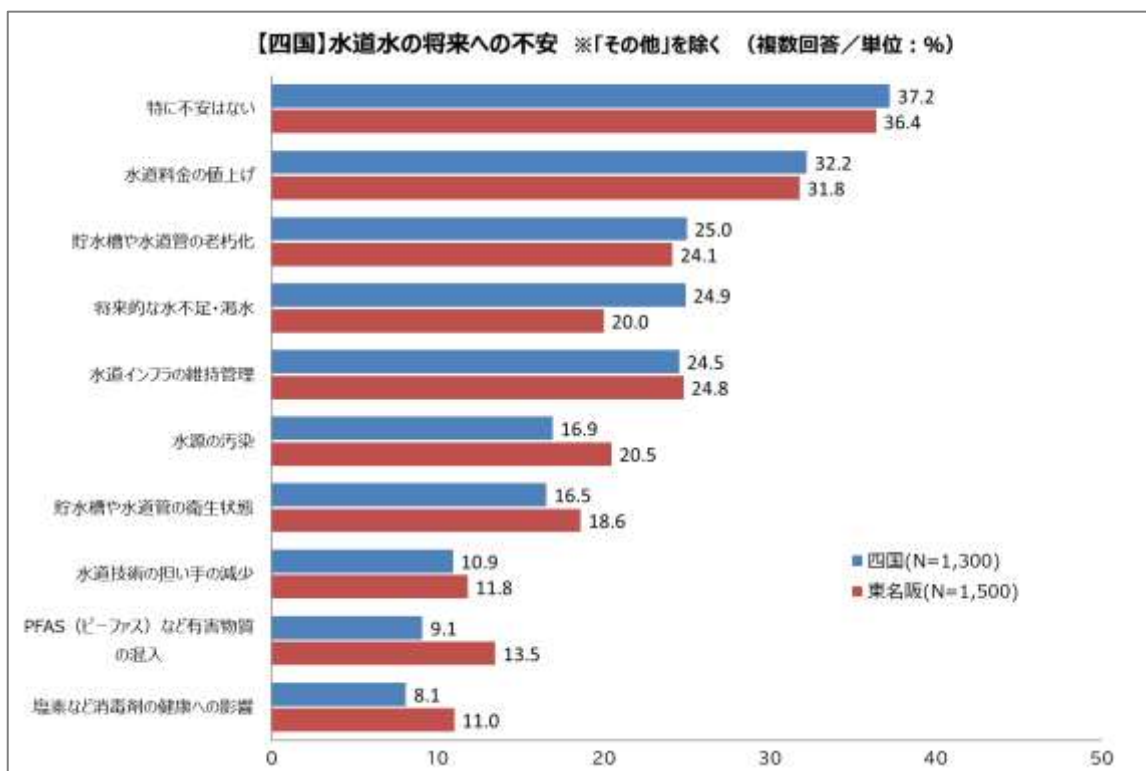
四国における水道水への不満は、「特に不満はない」が55%超の回答率でトップ。2位（不満のトップ）は「水道料金が安い」（24.4%）、3位「おいしくない」（13.1%）、4位「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」（7.8%）、5位「塩素など消毒剤は体に良くない」（7.1%）と、不満の傾向（料金＞味や質）についても、東名阪と同様の結果でした。



Q.水道水について将来不安を感じていることは？（9択＋その他＋特に不安はない）

◇4人に1人は「将来的な水不足・渇水」を不安視

四国における将来に向けた水道水の不安は、1位「特に不安はない」（37.2%）、2位「水道料金の値上げ」（32.2%）と、トップ2は東名阪と同様でしたが、3位「貯水槽や水道管の老朽化」（25.0%）、4位「将来的な水不足・渇水」（24.9%）、5位「水道インフラの維持管理」（24.5%）と、3位以下に違いがみられました。中でも、「将来的な水不足・渇水」は、東名阪の5人に1人に対し、四国では4人に1人が回答しています。四国調査では、水不足や渇水など、水がなくなるリスクへの危機感や意識の高さが一貫して見られました。



【調査概要】

第32回（令和八年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,500人
- ◆調査対象者 : 東京圏(埼玉・千葉・東京・神奈川)、中京圏(岐阜・愛知・三重)、大阪圏(京都・大阪・兵庫)に居住する20代～60代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 2026年6月11日（木）～16日（火）
- ◆回収数（人） :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合 計		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	小計
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合 計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

特別調査「四国における水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,300人
- ◆調査対象者 : 四国圏(徳島・香川・愛媛・高知)に居住する20代～60代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 2026年6月11日（木）～16日（火）
- ◆回収数（人） :

	徳島県		香川県		愛媛県		高知県		合 計		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	小計
20代	11	12	8	9	14	20	17	9	50	50	100
30代	36	35	40	49	50	48	24	18	150	150	300
40代	38	34	35	44	52	53	25	19	150	150	300
50代	23	29	48	44	48	52	31	25	150	150	300
60代	32	28	41	32	57	64	20	26	150	150	300
合 計	140	138	172	178	221	237	117	97	650	650	1,300
	278		350		458		214				

Oki's View の沖大幹博士プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）
 東京大学 大学院工学系研究科 教授
 日本水フォーラム 副会長

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より21年まで国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。2024年には、水のノーベル賞とも呼ばれる「ストックホルム水大賞」に選ばれ、紫綬褒章も受章。その他生態学琵琶湖賞、日本学士院学術奨励賞、国際水文学賞Doogeメダル（2021年）やヨーロッパ地球科学連合John Daltonメダル（2023年）など表彰多数。

